与謝野門下新詩社男性歌人による愛児の歌

――田村黄昏、万造寺斉の歌集から――

宮本和歌子

はじめに

明治末期の『明星』や『スバル』に、与謝野寛率いる東京新詩社の新進歌人として数々の作品を残した田村黄昏（写真一）、本名田村豊彦（明治十九年〈一八八六〉二月二十日～昭和八年〈一九三三〉十一月九日）であるが、東京帝国大学を卒業した大正元年（一九一二）以降はほとんど歌を発表せず、享年四十八での早い死は昭和九年（一九三四）一月『冬柏』第五巻第二号で「昨年十一月に新詩社の旧友田村黄昏（名は豊彦）氏が没せられた。氏は高等学校時代より同学の藤岡長和氏と共に「明星」や「スバル」へ歌を出された人である」と伝えられたのみであった。豊彦の第一子誕生を祝って色紙を贈ったという佐藤春夫(一)は豊彦の死も知らなかったのか、昭和三十六年（一九六一）五月から一年間『朝日新聞』PR版に連載した「美の世界」において豊彦の詠んだ歌を挙げ、「作者田村氏は、わが二十の日の詩歌の仲間であったが、田村法学士はその後どうしたか消息も知らないが、さくらの時到るごとに、この一首とあの温厚な人がらとが思出されてなつかしい」(二)と記している。

豊彦の経歴は従来詳らかでなく、原田登編『帝国大学出身録』（大正十一年〈一九二二〉四月帝国大学出身録編集所）と改造社編『新万葉集』第五巻（昭和十三年〈一九三八〉五月改造社）に簡単に記されているのみであった。両者で出生地に異同がある他、前者は出生月や没年、大学卒業や就職の月が記載されておらず、後者は大学卒業月や没した月が誤っていた。そうした中、豊彦遺族の協力も得て略年譜を作成し生没年や大まかな経歴が明らかとなり、豊彦七回忌に生前親交のあった者へ配布するため作成された田村黄昏私家版歌集『黄昏』が遺族宅に存在することも判明した(三)。『黄昏』には多くの未発表歌が含まれているが、就中昭和期の作として収録

写真一（遺族提供）

されている歌は全て未発表である。『黄昏』を見ると第一子が誕生して以降の彼の詠歌には子供をテーマにしたものが多く、それまでの飲酒や色街、恋や人生の悩み、退屈を詠んだ作風と一変している。本稿では第一子誕生後に詠まれた田村黄昏の愛児の歌を紹介し、彼と同年齢であり同時期に東京新詩社で活動した万造寺斉の愛児の歌と随筆も参照し、明治生まれの男性二人によって記された我が子への愛情を見ていく。

一　田村黄昏による我が子の歌

田村黄昏私家版歌集『黄昏　亡夫豊彦偲び草』は、昭和三年（一九二八）に結婚した豊彦の二番目の妻・姚子（たよこ）の依頼により、豊彦第三高等学校入学以来の友人であった小牧茂彦が選出し刊行されたものであるという[四]。小牧による『黄昏』巻頭言「序に代へて」では豊彦について、「君は一面円滑玲瓏な社交人であり多角的インテリゲンチヤの才人であつた」が「晩年は才人の悌は無くなつて平凡な一会社員の観があつた。会社を止めて後は実にいゝお父さんでもあつた」としている。歌人としての豊彦については、「大学を卒業して会社員となつてからは自然歌の方は不勉強になつてゐたが、そのあとずつと歌を作つてゐたならと惜しい気がする。云はばその頃が一転機の頃であつて青年の客気の鎮静すると共に、才気喚発と云つたやうな華やかさを失ひ自分で少し気を腐らしたのではないかと思ふが、それは詩想の涸渇でなくして円熟に一転機する時代でもあつたのだ。と云ふのはその後折ふしに作つた歌が却つて仲々によいものがあるやうに思はれるからである」と分析し、「君の歌を見ても才人才に溺ると云はれるやうなのを見出す。これは見様によつては一種の気障を感ぜしめるものである」と評している。小牧は若い日の豊彦の歌を豊かな才能によって詠まれた華やかさのあるものと述べているが、『黄昏』に収録されている全四百四十一首[五]の中でも晩年の歌、特に豊彦四十三歳で第一子となる長女・寿子が誕生した昭和四年（一九二九）以降の歌に、小牧の述べる「円熟に一転機」し「折ふしに作つた歌が却つて仲々によいものがある」と考えられる。

『黄昏』所収歌のうち明治四十四年（一九一一）以降分に、「飽きもせで子のうはさなどくり返す友達ばかり多くなりゆく」という歌が収録されている。『黄昏』所収歌は明治三十八年（一九〇五）から明治四十三年（一九一〇）までは年毎に、あとは明治四十四年以降昭和二年（一九二七）までと昭和三年、昭和四年、昭和五年（一九三〇）に分類されているため、この歌は豊彦が二十五歳から四十一歳までの間に詠まれたということになる。この歌の前後に「醜さよ三十路の男身はやせて死にもしつべくものをおもへる」や「葉ざくらを食む虫などを放たまし三十路になりてあまり濃き髪」と三十代に至った心境を詠んだ歌がある[六]ことから、大正五年（一九一六）頃、三十代に入った時の詠歌と推測される。自身の肉体に見られる加齢の兆候や三十代になった心境を詠んだ歌に混じったこの歌から、子供の話ばかり続ける友人たちを見て既に若くはない己の年齢を実感すると同時に、子供とはそれほどよいものなのだろうかと不思議に思う豊彦の姿が見て取れる。

豊彦は生涯に二度結婚しているが、与謝野夫妻の仲介により大正八年（一九一九）十二月三十一日に浜田さいと見合いをし

翌年七月十三日豊彦三十四歳の時に彼女と最初の結婚をしたものの、豊彦の母・つ祢(七)がきつい性格であったせいか(八)、約十ヶ月後の大正十年（一九二一）四月二十三日協議離婚によって短い結婚生活を終えている(九)。その後七年間再び独身生活を送った豊彦であるが、昭和三年五月八日四十二歳の時、あと三週間で満三十歳を迎える下間（しもつま）姚子と結婚、昭和四年九月六日に長女の寿子が、昭和七年（一九三二）十二月十日に長男の照彦が誕生するが、照彦が満一歳を迎える前に豊彦は病死している(十)。姚子とは五年半の結婚生活であり、初婚時と通算しても豊彦が夫として家庭生活を送ったのは生涯のうち六年四ヶ月、父親として暮らしたのは四年二ヶ月であった。子供の話ばかり繰り返す友人を不思議に思っていた豊彦も、父親となってからは彼自身が「偶々私の処へ来ても始から終まで子供のことばかり話して帰ってゆく」こともあったと、小牧茂彦は前掲「序に代へて」で記している。

『黄昏』所収の昭和四年分詠歌は十一首、昭和五年分詠歌は二十三首合計三十四首だが、そのうち昭和四年分六首、昭和五年分十二首の合計十八首が、子の誕生を待つ情景や愛らしい我が子の様子、我が子の待つ家庭の楽しさなど我が子に関する歌である。遺族宅に残る『黄昏』所収歌選出についての小牧の覚え書きによると『黄昏』所収歌は生前豊彦が複数回行っていた自選に大部分を依拠しているとのことで(十一)、『黄昏』と遺族提供の豊彦の手稿類には意図的な改変や修正の跡は認められず、『黄昏』所収歌は豊彦の意思に忠実なかたちで収められていると考えられる。豊彦が詠歌の自選や推敲のため晩年に使用していたとみられる手帳を参照すると、書き付けられている昭和四年分詠歌十六首、昭和五年分詠歌十七首のうち我が子に関する歌は昭和四年分六首、昭和五年分十一首である。明治四十四年以降分終盤から昭和期分の歌には、「擲てる賽のまにまに十年ほど歩み来しかど少し疲れぬ」や「食欲は更になけれど退屈を追ふ糧としてパンと牛乳」のように、会社員として毎日算盤や帳簿に向き合う日常に飽き退屈を感じる歌など、勤務していた大阪織物株式会社での日々の光景や人生の侘しさや疲れを詠んだものが少なくない。しかし、昭和四、五年の子供に関する詠歌には、それまでの歌に見られなかった日常生活の喜びや穏やかな日々の楽しみが詠まれた歌が増えている。

『黄昏』昭和四年分に、「歌おもふゆとりだになく病院の廊下に待てる永き一日」という産気付いて入院した妻に付き添い分娩室の外で気を揉む歌がある。また、「鳩の群窓の下にて餌を拾ふ見つつも思ふ母と子の上」「鳩にやるパンの屑をばつと来りとりて逃げたる一羽の雀」は、子供の誕生を待つ長い間窓の外の鳩を眺めながら過ごし、時には餌としてハトやスズメにパンをまきながら待っていた際に詠んだと思われる歌である。我が子の誕生は、「吾子がいま健き産声上げつらむ時とも知らず廊下にて待つ」や「廊下にて今こそ吾子の生れつと聞きつる時の胸のどよめき」と詠まれ、誕生の瞬間も廊下で待つしかない父親の立場や誕生を知らされた時の高揚した気分を臨場感たっぷりに詠っている。「吾子の声どれにかも似るそこここの室よりひびく赤子らの声」と新生児の声で溢れる病院の廊下を詠じた歌もあるが、長女は大阪の日本赤十字社大阪支部病院で生まれたと戸籍謄本に記載がある。「本院ハ大阪市ノ東南部天王寺区筆ヶ崎町ニ在リ。（中略）衛生上良好ノ地ナリ。東南約十

丁ニシテ官設鉄道桃谷駅アリ」(十二)と、同病院は昭和四年当時も現在と同じ大阪市天王寺区筆ヶ崎町にあった。ハトの群に餌をやりながら子供の誕生を待ち、我が子誕生の知らせを聞いて味わったことのない胸の高鳴りを感じたという豊彦の歌は、当時も今も同じ場所で同じように生命の誕生が繰り返されていることを物語っている。

昭和五年分「楽しさは児と遊ぶときただ一人酒を汲むときその外になし」では明治四十四年以降分以前も多かった飲酒の楽しみを、子供と遊ぶことと同等の楽しみに数えている。同じく昭和五年分として収録されている「子の遊ぶむしろの上にわれも居て煙草を吸ひて静心なし」「正月のやすみはたのし子の遊ぶむしろの上にわれも遊べば」は幼子の遊び場として敷かれたむしろの上で娘を見守る歌であるし、「遊びつつ『しい』を漏らして泣くときは幼なごころもいたみてあるらし」は、失敗を気まずく感じているらしい娘の心中を察しながらも微笑ましく受け止める豊彦の愛情に溢れた歌である。このような父の愛情を感じ取ってか、「せがみ得し菓子を打ち割りわが父にすすむるこころ何と云はまし」「冷えし手に父のふところ探りつつ泣き寝入る子のあはれなるかな」のように、娘も父を慕っていた様子である。実際に娘の寿子は四歳で死別した父を長く思慕し、父の好物が鰹であったことも後々まで回想していたという遺族の話である。

『黄昏』所収昭和四、五年分詠歌の半数以上が我が子を詠んだ歌であることを見ても、旧友の小牧宅に立ち寄り子供の話ばかりして立ち去る豊彦の様子が誇張のないものであったと推測できるが、第一子誕生に際しての豊彦の喜びについては、「あなたの生まれた時のお父様は天にも昇る心地したと言われました。小牧様のお宅へ伺っても、始めから帰るまで子どもの話で田村も変わったものだと思ったと言われました。生きていれば何十年かの愛情を四年余りで使いはたされたのでしょう(下略)」という姚子の走り書きのようなメモも遺族宅に残されているという(十三)。豊彦は若い頃から持病があったらしく、『黄昏』所収歌明治四十一年(一九〇八)分に七首、明治四十四年以降分に「降りもせすあがりもやらぬ空のごと長き病のわれにまつはる」や「過ぎし日の悪夢をまたもくり返す病院に入る日の夕かな」など九首、持病の再発や入院を示唆する歌を確認できる。明治四十四年以降分の「この年ごろわれを導く運命の暗き路のみ選ぶことかな」や「いかにともせんすべもなし眼を閉ぢてかの運命にひきずられゆく」からは、闘病への疲労や諦めが見て取れる。時折悪化する病気の傍ら会社員として勤務を続け、「ほくほくと街の埃の中をゆく荷馬車の馬に似たる一日」と味気ない毎日を送っていた豊彦に訪れた娘の誕生が経験したことのなかったほどの喜びや楽しみをもたらし、日常生活に精彩を与えたことは間違いない。豊彦の幼い娘と息子は成長に伴いさらなる喜びや楽しみを豊彦に与え、幼児の習性を巧みに捉えた歌を一層多く詠ましめたことであろうが、残念ながら彼は子供の成長を見届けることは叶わず、愛児の成長を歌に残すこともできなかった。

豊彦は第三高等学校卒業の数ヶ月前、明治三十九年(一九〇六)三、四月頃に新詩社加入を果たし(十四)、東京帝国大学在学中の明治四十三年十一月五日には与謝野寛、晶子夫妻はじめ新詩社社友と塩原に一泊旅行へ行き(十五)明治四十四年十一月四日

には上野精養軒で開催された与謝野寛渡欧送別会（写真二）に参加するなど（十六）、特に会社員となるまでは新詩社社友や関係する文人と親しく交流していたようである。また、『与謝野晶子全集』第十一巻（昭和九年〈一九三四〉八月改造社）所収「街頭に送る」中の「晩春遊記」（昭和四年四月）で、昭和四年四月十四日から十日間の旅行中に会った旧友の一人として田村黄昏の名を挙げていること、遺族宅に残る大正十五年（一九二六）八月十三日付与謝野寛書簡、姚子が夫、娘と与謝野家を訪れた話や晶子が頻繁に借金にやってきた話を親族にしていたことから、豊彦は晩年近くまで与謝野夫妻との交流があったことが判明している。

写真二（遺族提供、後列右から四番目が豊彦）

二　万造寺斉による我が子の歌

豊彦が仲間に加わり活動していた明治三十九年（一九〇六）頃から大正三年（一九一四）頃の新詩社について、彼より一歳年長の木下杢太郎（明治十八年〈一八八五〉八月一日～昭和二十年〈一九四五〉十月十五日）は「当時の新詩社は、畳の上に座りこそはしたが、ちやうどフランスの文学者のサロンのやうなものであつた。与謝野夫妻に歌や詩を添削して貰ふものの外に、当時の既に名を成した文学者が集り、時として室に充満するやうなこともあ」り、「かなり傾向の違ふ人が新詩社に見かけられた」と、文化的交流が盛んに行われていたことを記している（十七）。殊に明治四十年（一九〇七）七月末からの与謝野寛、平野万里、吉井勇、北原白秋との一ヶ月におよぶ九州旅行では「われわれ風情であちこちで講演などし」、「みちみち皆即興の詩を作」り、「この旅行で島原とか、天草とか、富岡とか、平戸とかを見て、それで其後しばらくは、南蛮、紅毛、天草騒動などに対する史的回顧がわれわれの文学の中心になつた。（中略）翌月の「明星」に白秋がさういふ趣味のものを沢山発表し

た。（中略）「邪宗門」にはたしかさういふ種類のものが沢山出てゐる筈である」と通常の若者ができないような講演の機会も与えられ、北原白秋などは創作にも大きく影響を受けたとある（十八）。

他方、豊彦と同じ明治四十一年（一九〇八）の東京帝国大学入学後まもなく新詩社に加入し、「堀口大学、佐藤春夫、中原綾子、田村黄昏、藤岡長和の諸氏とも新詩社を介して交を結んだ」（十九）という豊彦と同年齢の万造寺斉（明治十九年〈一八八六〉七月二十九日～昭和三十二年〈一九五七〉七月九日）は、万造寺斉『蒼波集』（昭和七年〈一九三二〉七月街道社）あとがきに代えた回顧の記「成長のあと」で「個性の解放、古臭い因襲道徳の破壊、個人の自由を束縛する社会制度への反抗」が当時文学を志す者の標語であったとし、「これ迄の作家が取扱ふことを敢てしなかつた人生の裏面、ことに男女の性的関係の精細露骨な描写が流行しだした」と当時の文壇の潮流を分析している。そして、「これまで、日曜毎に、或は学期末の休暇毎に帰省して、自分の家庭及其の周囲の田園生活と不断の接触を保つて来た私……堅苦しい、むしろ頑固とも云ふべき道徳観念を子供の時分から頭の中に詰め込まれて、料理屋の門をくゞるなどは勿論のこと、菓子屋の店頭に立つことさへ、学生にあるまじき事だと考へさせられてゐた世間知らずの私…その私は突然、故郷を遠く離れた東京の寂しい下宿生活の孤独の中に、恐ろしい都会生活の渦巻と誘惑との中に投げ出されたのだ」（二十）と、そうした文学者たちとの交流が始まった万造寺自身も遊蕩に溺れるようになったことを記している。

若い学生にとって新詩社での会合は著名な文学者との出会いの場であった反面、遊蕩を覚え悪所に出入りする契機となったというのである。「成長のあと」では、「君のなほ見送るまでは急ぎつつ君の消ゆれば立ちて泣きつつ」「いくとせの夜ごとに見つる夢をまた我が手枕に見るやたはれめ」「いつはりを君も言ひまた我も言ひ別れ来しかど悲しかりけり」など色街での情景を詠った自作の歌を挙げ、「もちろん、かう云ふ歌には与謝野氏をはじめ、私から云へば先輩である吉井氏（論者注・吉井勇のこと）や北原氏（論者注・北原白秋のこと）やなどの影響も相当にあるだらう。私は、それを否定しない。しかし、その影響は多くの場合、故意の模倣と云ふよりも、むしろ無意識の感染だつた。私の心は、自分も、また遊蕩生活の悲痛な経験から深刻なる実感の歌を得たいと云ふ熱意を失はなかつた」と述べている（二十一）。この後に、「実際、この頃の私は、自分が優等の泥濘にまみれて、再び浮ぶことのできない堕落のどん底に沈まうなどとは予想してゐなかつた。私は決して自分の清浄と無垢とを失ふことなく、惑溺の深刻な経験から人生の珠玉をかち得て、再び以前の正しい生活へ凱旋するつもりだつた」と続き、一度足を踏み入れた遊蕩生活から抜け出すのに大変な苦労をしたことが語られていく。

遊蕩によって生まれた歌として万造寺が載せている歌の数々のように紅灯での様を詠んだと考えられる歌は、豊彦も多く残している。昴発行所『スバル』明治四十三年（一九一〇）十一月号に発表され『黄昏』明治四十三年分としても収録されている三首「ねくたれし腕の上の髪のごとわが脈絡を乱れゆく酒」「ことごとにあげつらふより寂しかり君がこのごろ答せぬこと」「ひとり寝の寝起の袖をおびやかす風のやうなり君がもの云ひ」（二十二）、『スバル』明治四十四年（一九一一）八月号にも発

表し『黄昏』明治四十四年以降分に収められている「夕風のまねくがごとく靡くとき口紅のごと灯のともる時」や「短夜のきぬぎぬよりも肌さむき朝風はなほあはれなるかな」などである。豊彦も万造寺も、新詩社の一員として様々な会合や旅行に参加し、酒を伴う楽しい時間を過ごしていたらしいことは、両者の歌や著述(二十三)だけでなく遺族宅に保管されている古い写真によっても窺い知れる(二十四)。

東京帝国大学に籍を置きながら新詩社で活動をしていた豊彦の実家は大阪に、万造寺の実家は鹿児島にあったが、与謝野夫妻はじめ数々の今をときめく文人との交流機会が得られる新詩社の会合は、不安と寂しさを抱え親元を離れて暮らす十代や二十代前半の若者に帰属感を与え居場所を提供する役割もあっただろうし、木下杢太郎が記しているように学生同士の交流では得られない文化的刺激を与え、新しい才能発見と育成を行う場であっただろう。他方、万造寺の回想と併せ、明治四十一年十一月東京新詩社『明星』満百号記念終刊号の「野州塩原温泉」と題する中沢弘光の挿画に大きな建物の前の露天風呂で入浴しているらしい多くの裸女と芸者の手を引いてそちらを目指す男性の姿が描かれていること、借金に訪れた与謝野晶子から金策の礼として渡されたと伝わる豊彦遺族宅の与謝野寛直筆短冊には、中沢の挿画と類似した場面を詠ったと思われる「山の湯にみどりの羽をぬぎ放ち／紅雀なりしがしら鳥となる　寛」という未発表歌が書き付けられている(二十五)ことを考えると、従来文芸として扱われなかった人間の感情の深層を描写するためには男女の性的関係についての熟知が必要であるという大義名分の下に新詩社での会合を口実として若者に紅灯緑酒の悦楽を覚えさせ、真面目な生活から外れ酒色に溺れる怠惰な生活へ陥る契機をもたらしていたのであろう。

万造寺は信州別所温泉の常楽寺滞在中に偶然葛西善蔵と知り合い派手な遊興を繰り広げ(二十六)、葛西の作品「不能者」において札束で芸者を欲しいままにしようとする男のモデルとなっている。遊蕩を繰り返しながら自己嫌悪や絶望に陥り社会的な失敗も経験した万造寺は、京都に住むようになってから(二十七)「疲労し衰弱し頽廃してゐた私は、京都の平和と静寂との中に楽しい安全な碇泊処を得た。（中略）京都の美くしい市街と自然との影響に浸つた」(二十八)と、精神の安定が得られるようになったことを記している。だが、彼に精神的な碇泊処をもたらしたのは、京都という土地以上に子供の存在が大きかったのではなかろうか(二十九)。万造寺は随筆「花園にゐた頃」で、「私が京都に来てから、もうかれこれ十四年以上になる。この間に私は凡そ六度ほど家を移つた。しかし其のうちで、最も忘れ難い深い印象を私の記憶に刻みつけて居るのは大正十三年の春から昭和二年の春まで三年ほど住まつてゐた花園の家であろう」と京都府葛野郡花園村伊町一九(三十)に住んでいた頃の記憶を述べ、「移つて来た当時、子供は皆まだ小さかつた。（中略）第三女が生れ、翌年の七月には第四女が生れた。（中略）かうして、長い間、自由な浪人生活を送つて来た私も、いよいよひとり前の一家の主人になり、身動きも出来ないほど煩悩の羈絆によつて縛りあげられる事となつたのである」と記している(三十一)。心は子供への愛情に満ちてはいても長年繰り返した放浪生活に魅力を感じ、単身旅行へ出ては「家にあらば夕餉を終へて我が子等と物語よむ春の宵なり」「甲板の夜更けの露にそぼぬれて

吾は都の子等を思へり」「いとし子を置きて来つれば夏の海かがやく見れど心をどらず」(三十二)など、旅先でも我が子のことばかり心に浮かぶ様を多くの歌に詠んだという。

さらに、「最も烈しい愛着の情を感じたのは、この花園の家で呱々の声を挙げた第三女であつた。(中略)私は赤ん坊の時分から、この子が一番かわゆかつた。実際私はこの子によつて、父親としての底知れない愛と、それから生ずる無上の歓喜と、希望と憂慮とを最も痛切に味ははされたと言つてよい」(三十三)と大正十四年(一九二五)に生まれた三女・幸子への愛情を記し、仕事中も幸子のことを気にし、帰宅後すぐに娘の顔を見ないと安心できなかったこと、在宅中は一日に何十回も階下の幸子の顔を見に行ったこと、読書中でも泣き声が聞こえればすぐに階下へ行き泣き止むまで抱いてあやしたり、毎日のように赤子の幸子を抱いて散歩に行ったり六百メートルほど離れた神社まで乳母車を押したりしたことも前掲「花園にゐた頃」に記している。

幸子が歩けるようになってから近くの駅へ汽車を見に連れて行った折には「駅の前の石段に着くと、両手をついて、覚束ない足取りで、其れをゆつくり一段一段登つて行」き、「食時の時には、よく梯子段の下まで来て「ちゃちゃ、ちゃちゃ」と廻らない舌で二階の私を呼んだ。二階へ連れて来ると、必ず、椅子に攀ぢ登り、それから卓の上にあがつて、そこにある私の本だのペンだのをいぢくりまわした」と幼児ならではの行動を慈愛に満ちた文章で描写、生活の中心が三女の幸子となっていたことを回想し、「私の中には、暫くも静止して居ない或物があつて、絶えず私を動揺させ、煩悶させ、奮激させ、緊張させてゐた。(中略)何物かに己れを捧げずには居られない情熱は、迸つて子供への溺愛となり、自然への傾倒となつた。私には希望があり、生活の張合があり、努力の勇気があつた。この十年の年月は、私を、どんなに変つた人間にしてしまつたことだらう」と京都府葛野郡花園村に居住していた期間を評しており、不安定だった万造寺の精神が落ち着きつつあったことがわかる(三十四)。

彼は第一期、第二期『明星』や『スバル』に作品を多く発表し、時には編集も手伝い、『スバル』廃刊後は『我等』や『街道』を発刊しているが、菅原杜子雄編『万造寺斉選集』第十巻(昭和三十九年〈一九六四〉九月謙光社)所収「万造寺斉年譜」を見ると、昭和四年(一九二九)には新詩社社友が中心となって刊行に至った『冬柏』(三十五)の同人加入を、昭和十二年(一九三七)には『新万葉集』審査員依嘱と現代日本文学全集への参加を辞退している。前掲「成長のあと」によれば、『冬柏』に「与謝野氏に勧められて一度歌を送つたが、それも一度きりで断然やめた」(三十六)ともある。というのも、「氏に敬意を払つてゐると云ふことは、いつまでも新詩社の伝統を墨守すると云ふ事とは違ふ。私は、新詩社の伝統よりも自分の歌を愛し尊ぶ。私は自分の歌の成長を流派の束縛によつて沮害したくない。ましてや、筆を加へられることによつて、自分の歌に他人の臭味を浸潤させたくない。このことが、私を新詩社から遠ざからせたのだ」(三十七)という。『冬柏』に掲載された万造寺の歌(三十八)の中に、「以上或る歌人に」として「銭まうけしつつよき歌よむを得ば歌よむ事は人事の屑」「如何ばかり言あげずとも光る歌よむを得ざらば得る所あらじ」の二首がある。彼が与謝野夫妻率いる新詩社から距離を置くようになったのは、豊彦の妻・姚

子がそうであったように万造寺家も与謝野晶子による頻繁な金策目的での来訪に悩まされてのことであった可能性も考えられるが（三十九）、「成長のあと」では与謝野夫妻への敬意と感謝を示し、「自分の歌」の在り方や成長を重んじてのことと説明している。

「万造寺斉年譜」には昭和四年に生まれた二男の悠が生後二ヶ月半で亡くなったとあるが、前掲『蒼波集』所収「うたかた」には悠の百日咳罹患と肺炎の併発から危篤と死、納棺と火葬、葬儀当日から二週間後以降に詠んだ悲痛な歌の数々が収められ、「やうやくにひと日の仕事なしをへて帰れば胸を襲ふさびしさ」「夜もすがら吾子をみとりし其の時は今の我より楽しかりけり」「いとし子よ父は寂しさかぎりなし夢にだに来よ父がかたへに」（四十）など、受け入れ難い幼子の死に対する悲嘆が刻まれている。彼は新しいロマン主義芸術について前掲「成長のあと」で、「素樸にして強健、自由にして放胆なる人間精神の発動に重点を置くだらう」、「ただ芸術を玩弄するのみの好事者閑人の手から取り戻されて、詩歌に全身全霊を傾倒する者の懸命の努力の対象となるだらう。さうして、生悟りの隠遁主義、臆病なる超然主義、怜悧なる高踏主義の代りに、大胆なる生活への躍入が、よりよき世界への突進と冒険と闘争とが、高唱せられるだらう」（四十一）と展望を述べているが、愛らしい我が子の姿、常に頭を離れない愛児喪失の苦しみを詠った万造寺の歌の数々には紅灯をテーマとした歌とは比較にならないほどの率直な心の叫びが彼自身の飾らない言葉で表されている。これらの歌は、日々の生活の中で発揮される人間の感情を詠み上げていこうとする万造寺の姿勢が表れたものである。

新詩社と距離を置くようになってから詠まれたこれらの歌が紛うことなき万造寺の「自分の歌」であろうが、第一章で紹介した田村豊彦の昭和期の未発表歌もまた、余人の介入を経ない独自の言葉で詠われ残されたものである。豊彦の既発表歌は大部分が明治四十四年までに『明星』や『スバル』に掲載されたもので、明治四十五年（一九一二）以降に発表された歌で現在把握されているのは、大正三年八月我等発行所『我等』二首、大正十一年（一九二二）一月明星発行所『明星』十八首と死後の改造社編『新万葉集』第五巻（昭和十三年〈一九三八〉五月改造社）二首である。豊彦は大学卒業以降に新たな歌の発表をほとんどしなかったが、晩年に至っても作歌は勿論、過去の詠歌の自選や推敲は続けていたことを、遺族宅に残る手稿類から確認できる。彼は第一章で述べた自選、推敲用手帳に折を見て新たな詠歌や過去の詠歌の自選を書き込んでいたと見え、頻繁に手帳を開き鉛筆で何かを書き込む父に倣い長女の寿子が真似をして鉛筆で書き込むことがあったらしく、豊彦の書き込みだけでなく幼児のなぐり書きが複数ある。豊彦の手帳に認められる幼児の複数のなぐり書きは、幼い娘のそばで頻繁に豊彦が手帳への記入を行っていた証拠である。娘は大好きな父がいつも大事に持ち何か書き込む手帳を見て、父と同じ行動を取ってみたのだろう。四十代で初めて知った我が子への愛と若い頃から続けてきた詠歌、この二つが晩年の豊彦の生活で重きをなしていたことを、豊彦の手帳のなぐり書きが物語っている。他人の添削や改変を経ないまま手帳に残された豊彦の愛児の歌の数々は、悩みや疲労、紅灯の情景を詠んだ歌と異なり、深い愛情に支えられた観察眼をもって豊彦の独自性を発揮した歌として成

立している。豊彦にとっても万造寺にとっても、若き日の新詩社での活動は楽しく貴重な経験であっただろう。しかし、酒色が彼等の心を満たし人生を充実させることはなく、猜疑心なく信頼を傾け一心に甘えてくる我が子と過ごす日々の中で得られたものが心を満たし、追求していた作歌活動の理想形に近付き得たのだろう。

おわりに

田村黄昏という号を用いた田村豊彦と万造寺斉、明治十九年（一八八六）生まれの新詩社社友であった二人の歌人が、新詩社の活動から距離を置くようになって以降に詠んだ愛する我が子の歌を通し、彼等二人の作歌活動を考えてきた。今のところ歌に対する思想を書いた豊彦の文章は発見されていないが、万造寺は歌に対する熱い理念を書き記し、新詩社から距離を置くことになった理由も述べている。豊彦と万造寺の詠んだ愛児の歌の数々は、優れた歌を詠むための遊蕩は必須ではないこと、日常の光景や生活の中にも人間の喜怒哀楽が存在することに気付き、家庭内に帰属感を見出してある時には心の安らぎや喜びを得、またある時は歌によって悲しみを癒やすことを覚えてから詠まれたものである。紅灯での駆け引きや関係のもつれを詠んだ他の歌人と大同小異の若い頃の詠歌とは異なり、他者の介入を経ずそれぞれの独自性を伴ったまま残されたこれらの歌は、新詩社の中心から距離を置いてからの両者が各々のかたちで家族や歌と向き合い人生を送っていたことを示している。

なお、第二章で言及した、豊彦の妻を悩ませた与謝野晶子による金策目的の頻繁な来訪に関しては、姚子ら田村家側は与謝野家に渡した金を借金と認識していたが、遺族宅に残る寛や晶子の署名がある手紙を見ると、与謝野家側では返済の必要のない自発的な厚意による贈り物と主張していたふしがある。この問題については遺族宅で発見された複数の与謝野寛、晶子筆田村黄昏宛未公開書簡の翻刻とともに、稿を改めて検証する。

［注］

（一）令和五年（二〇二三）三月三十日豊彦の孫による談話に基づく。

（二）朝日新聞PR版掲載「美の世界」当該回切り抜き記事参照、引用。掲載年月日不詳。

（三）令和五年九月京都女子大学国文学会『女子大國文』第百七十三号掲載の拙稿「与謝野門下新詩社歌人・田村黄昏について――略年譜の作成、田村黄昏ならびに与謝野寛未発表歌の紹介――」で、作成した略年譜の他に遺族宅から発見された田村黄昏私家版歌集『黄昏』や与謝野寛未発表歌、豊彦と妻子、親族が写った昭和五年（一九三〇）と推定される写真を紹介している。

（四）『黄昏』は表紙、裏表紙、豊彦の詠歌の他に口絵、小牧茂彦の巻頭言「序に代へて」、姚子による巻末言で構成されている。『黄昏』巻末言には、「亡夫　豊彦七回忌に際し生前書留めて居りました詠草を畏友小牧茂彦様にお選びを願ひこの度偲び草として皆様に見て戴く事にいたしました」とある。小牧茂彦による巻頭言「序に代へて」には「明治三十六年九月、其時分の第三高等学校の寄宿舎の北寮第三室に顔を合せた中に、垢抜けのした学生が一人居た。夫れが田村君であつた」とあり、第三高等学校入学の明治三十六年（一九〇三）九月が豊彦と小牧の出会いであったと記

されている。

（五）口絵に載っている短冊に書き付けられた未発表歌「杯をふくみて見たるあめつちのおほらかなるを忘れかねつゝ」の影印も含めると、四百四十二首である。

（六）「飽きもせで（下略）」は注（五）の歌を除いた『黄昏』三百二十一首目、同様に「醜さよ（下略）」は三百十九首目、「葉ざくらを（下略）」は三百二十五首目である。

（七）戸籍謄本によるとつ祢は奥山金剛と三保の長女として文久元年（一八六一）五月六日に生まれ、明治十四年（一八八一）に田村典瑞と結婚している。つ祢の父、豊彦の母方祖父である奥山金剛の親族には小林一茶「おらが春」に一句が収められている李卿、または李郷という女流俳人がいるが、この人物の詳細は別の機会に譲る。

（八）注（一）に同じ。祖母である姚子から、前妻は姑の性格のきつさから出ていったと聞かされていたという。また、つ祢が姚子へきつくあたることを心配した豊彦の言葉が姚子によって書き留められ、メモとして遺族宅に残っているという。

（九）逸見久美編『与謝野寛／晶子書簡集成』第二巻（平成十三年〈二〇〇一〉七月八木書店）所収の大正九年（一九二〇）二月三日小林一三宛晶子書簡に、「このごろある人の結婚のなかだちをいたし居り候へば」とある。岩野喜久代編『与謝野晶子書簡集』（昭和二十三年〈一九五八〉二月大東出版社）所収大正八年（一九一九）十二月三十日付与謝野晶子から小林雄子宛の書簡には、「田村（豊彦）氏また明三十一日に見合ひいたされ候へば、その結果の解る時、三月より早く大阪へまゐることにもきまり候はんとて」と、豊彦が見合いをする旨記されている。また、遺族宅に残る大正九年と推定される三月二十六日付与謝野寛、晶子連名の田村黄昏宛書簡から、豊彦が与謝野夫妻に縁談成立の礼を贈ったことがわかる。結婚と離婚の年月日は遺族提供の戸籍謄本による。

（十）結婚年月日と妻子の生年月日は遺族提供の戸籍謄本に基づき、豊彦の死因は遺族の談話による。

（十一）枠外に「小牧用箋」と印字された特注の原稿用紙に「選の経過説明」と題し、「明治四十三年頃迄の歌（全部あるべし）一千二百五十首より第一次自選として四百四十八首を選み更に又百七十三首程を第二次自選とせる如し大体之に依る。／（中略）／一、第二十七頁以下はノートにあるものの大部分を書き上げ削除したるものは少数に過ぎず」などと書かれている。

（十二）日本赤十字社大阪支部病院『日本赤十字社大阪支部病院概況　昭和三年度』（昭和五年九月）参照、引用。

（十三）令和五年五月二十五日豊彦の孫より聴取。

（十四）『明星』午年第五号（明治三十九年〈一九〇六〉五月東京新詩社）誌上で、大阪の田村豊彦の新詩社加盟が報告されている。一方『与謝野寛短歌全集』（昭和八年〈一九三三〉二月明治書院）下巻所収「与謝野寛年譜」には豊彦の新詩社加入は明治三十六年とある。本文掲「序に代へて」に豊彦の作歌ノートは明治三十六年秋に始まっているとあるが、明治三十九年までの『明星』には田村黄昏の作品も名前も登場しないことから、豊彦の新詩社入社は明治三十九年と考える。

（十五）明治四十三年（一九一〇）十二月『スバル』第二年第十二号「消息」欄に「十一月五日に新詩社連の塩原行きがあッた」とあり、参加者として与謝野夫妻と長男の光、平出修夫妻とその娘の他、江南文三や、万造寺斉、藤岡長和、佐藤春夫や堀口大学らと

ともに田村黄昏の名がある。

（十六）田村黄昏こと田村豊彦が明治四十四年（一九一一）十一月四日上野精養軒で開催の与謝野寛渡欧送別会に参加したことを明記した文言は見つかっていないが、当日撮影された記念写真に豊彦が写っている。最前列中央に主役の与謝野寛、その左隣に寛の長男・光が座り、同じ列に森鴎外や永井荷風、伊藤佐千夫や吉井勇が座っている。後列には佐藤春夫、高村光太郎、江南文三、万造寺斉、北原白秋、木下杢太郎らがいるが、豊彦は最後列に坊主頭の和装で立っている。遺族に確認を取ったところ、豊彦の長男・照彦に酷似した容貌であるとのことであった。

（十七）『改造』第二十四巻第十二号（昭和十七年〈一九四二〉十二月改造社）掲載木下杢太郎「北原白秋のおもかげ」より引用。

（十八）注（十七）に同じ。

（十九）本文掲『蒼波集』所収「成長のあと」より引用。

（二十）注（十九）に同じ。

（二十一）注（十九）に同じ。

（二十二）『スバル』誌上では「ひとり寝の寝起の袖をおびやかす風のやうなる君がもの云ひ」であるが、『黄昏』では四句目が「風のやうなり」となっている。

（二十三）万造寺は本文掲『蒼波集』所収「成長のあと」で、新詩社加入後酒色に溺れ、自己嫌悪に陥りながらも堕落した生活からの脱却に苦労したことを記している。豊彦は父親譲りの酒好きであったといい『黄昏』に飲酒の歌が多数収められている。

（二十四）日中の屋外で若い豊彦や万造寺、堀口大学らが屈託のない笑顔を浮かべている写真に、大きな酒の瓶がいくつも写っている。

（二十五）この歌が書き付けられた短冊に関する詳細は、注（三）の拙稿でも触れている。

（二十六）昭和六十年（一九八五）三月東洋大学短期大学『東洋大学短期大学紀要』第十六号掲載、大森澄雄「葛西善蔵年譜」による と万造寺と葛西の出会いは大正八年五月三十一日、本文掲「万造寺斉年譜」には「不能者」モデルとなったことに激怒したのは大正六年（一九一七）とあるが、「不能者」発表は大正八年八月『改造』であるため両者が出会ったのは大正八年五月が正しいと考えられる。

（二十七）本文掲『万造寺斉選集』第十巻所収「万造寺斉年譜」によれば、万造寺が京都に移り住んだのは大正八年、厨川白村の便宜による京都帝国大学大学院入学に際してのことである。

（二十八）注（十九）に同じ。

（二十九）本文掲『万造寺斉選集』第十巻所収「万造寺斉年譜」から万造寺は妻ノブとの間に二男五女をもうけていることを確かめられるが、男子二人はいずれも生後一、二ヶ月で夭逝している。

（三十）『京都府学事関係職員録　大正十三年五月十五日現在』（大正十三年〈一九二四〉六月京都府教育会）に大谷大学予科教授の一人として万造寺斉の名があり、「葛、花園村伊町一九」と、国鉄花園駅にほど近い住所が記載されている。

（三十一）菅原杜子雄編『万造寺斉選集』第六巻（昭和三十九年〈一九六四〉七月謙光社）所収「花園にゐた頃」引用。初出は『街道』第五巻（昭和十年〈一九三五〉）だが未見。

（三十二）注（三十一）同書参照、引用。

（三十三）注（三十一）に同じ。

（三十四）注（三十一）に同じ。

（三十五）冬柏発行所『冬柏』第一巻第一号（昭和五年三月）の「消

息」欄に、「新詩社の同人が平野万里君を推して雑誌「冬柏」の編輯及び発行の主任に当つて貰ひ、東京及び各地の同人が平野君に対し出来るだけの協力と助成とを負担すると云ふ組織の下に、この「冬柏」が発行されることになつた」とある。

（三十六）注（十九）に同じ。

（三十七）注（十九）に同じ。

（三十八）冬柏発行所『冬柏』第一巻第三号（昭和五年五月）に「暮春初夏」と題し、或る歌人等にとした二首の歌、善良な友人を陥れた者への憤りを詠んだ歌など二十九首が掲載されている。本文に掲げた『冬柏』に「与謝野氏に勧められて一度歌を送つた」というのはこれを指していると思われるが、「冷やかに笑ひ去らんと思へどもさすがに心平かならず」「いと強く否とこたへておほらかに我は其場を去るべかりけり」といった決別の意思が窺える歌もある。

（三十九）姚子のところに与謝野晶子が単身で借金に訪れることが頻繁にあり、代償として夫妻の歌を書き付けた短冊を置いていったという。姚子は後々までも孫や嫁にその話をし、与謝野夫妻の短冊も嫌がって大部分を近所の住民に譲渡していたとの遺族の話である。現在確認できる遺族宅の与謝野夫妻筆短冊は寛筆二枚、晶子筆四枚で相当多額の金が与謝野家に渡ったものと推測される。また、冬柏発行所『冬柏』第三巻第十二号（昭和七年〈一九三二〉十一月）で、『与謝野寛短歌全集』刊行と寛の書斎補修を目的とし一口十円一人一口以上の「与謝野寛先生還暦祝賀基金」を募り、『冬柏』第四巻第三号（昭和八年二月）で「与謝野寛先生還暦祝賀基金御送付御芳名」を掲載している。十円の欄に田村豊彦の名前があるが、万造寺斉の名前はどの欄にもない。

（四十）本文掲『蒼波集』所収「うたかた」より引用。

（四十一）注（十九）に同じ。

［付記］

引用文は通行の字体を用い、斜線で改行を表し、適宜ルビを省いた。豊彦の遺品の数々や『黄昏』、談話を提供し協力してくださった豊彦の遺族にはこの場を借りて改めて深く感謝申し上げる。

（みやもと　わかこ・京都女子大学非常勤講師）